

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書

研究代表者 所属・職名 自然・生活教育学系・教授

氏名 東原 貴志

研究期間 令和5年度

研究プロジェクトの名称	小学校等における木製玩具の活用と教育効果に関する研究
研究プロジェクトの概要	<p>国産のスギ材やヒノキ材などを活用した積み木・ブロックの玩具が相次いで発表されている。これらのピースは木造建築の構造部材や木製家具の部材と同様に、突起や窪みを有するため、丈夫で複雑な形状の立体物を構築できる。そこで本研究では、保育参観、授業参観を通して、幼児や児童の発達と木製玩具とのかかわりについて調査を行う。</p> <p>さらに、これらの木製ブロック玩具については、従来のプラスチック製と比較して、広げる際や片づける際に発生する音が小さく、不快に感じられないとされる。そこで、木製玩具の落下時に発生する衝撃音を分析し、子どもたちに心地よさを与える要素について明らかにする。</p>
研究成果の概要	<p>N県J市内の保育所および幼稚園にて、幼児がこれらの玩具に興味を持って関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶか、組む遊びやポッチをつなぎ丈夫な立体物をつくる遊びがみられるか、自由保育の様子を観察した。さらに、同市内の小学校言語通級指導教室の場面で自立活動の教材として使用し、構音の改善や制作物を通じたコミュニケーション指導に資するか検討した。</p> <p>観察の結果、保育所では園児が常に遊ぶ様子が観察された。3歳児、4歳児は玩具提供から5か月後にはポッチや溝を活用して高く、複雑に組む様子が観察され、木製玩具の特徴を理解した遊びができるようになっていた。小学校の言語通級指導教室では、1年生から3年生の児童が遊ぶ様子を観察できた。木製玩具の遊びを通じた教師との会話が成立しており、正しい発音や楽に話す方法の指導に有効ではないかと考えられた。</p> <p>木製玩具の衝撃音の測定は次の通り実施した。ブロック1個を高さ約45cmから、同じ種類のブロックを敷き詰めた床に落下させた。敷き詰めたブロックは、大小数種類を使用した。その結果、木製はプラスチック製と比較して振動の大きさのピークの周波数が低いことが明らかとなった。このことが不快に感じにくい理由の一つではないかと考えられた。</p>
研究成果の発表状況 (※今後の予定も含む。)	<p>東原貴志、大園慶、吉澤千夏、藤井和子：材質の異なるブロック玩具の衝撃音に関する考察、第34回日本産業技術教育学会北陸支部大会 2023.12.10</p> <p>東原貴志、吉澤千夏、藤井和子：子どもの発達を支援する木製玩具の活用 保育所および小学校における事例、第76回日本家政学会大会、2024.5.26 吉澤千夏、東原貴志、藤井和子：子どもの発達を支援する木製玩具の活用 (2)、第76回日本家政学会大会、2024.5.26</p>
学校現場や授業への研究成果の還元について	令和6年度上越教育大学出前講座「17木のおもちゃで遊び、学ぶ」を開講し、広く地域に研究成果を還元する。